

「作品介绍」

守住貫魚筆「大麻比古神社遠望図」について

須藤茂樹

幕末・明治を生き抜いた絵師守住貫魚（一八〇九—一八九二）は、文化六年七月生まれで、徳島藩御用絵師渡辺広輝、ついで江戸の幕府御用絵師住吉広定にやまと絵の技法を学び、藩の御用絵師となった。十二代藩主蜂須賀斉昌に重用され、徳島県指定文化財「全国名勝絵巻」十巻（徳島県立博物館蔵）などの作品を遺している。時代が明治に改まると、徳島市富田の大麻彦神社、金刀比羅神社、国瑞彦神社などの宮司を歴任した。それ以後大阪に移り、多くの作品を描いている。明治二十三年（一八九〇）に帝室技芸員が設置されると、貫魚はその初代のメンバーに日本画の重鎮のひとりとして選ばれている。近世—近代徳島の画壇を作り上げただけでなく、近代日本画壇の発展に大きく寄与した人物としてもっと評価されるべきである（福田憲熙『阿波画人志』「原田印刷 一九九六年三月」）。

文化の森の徳島県立博物館には、守住貫魚の下書きや写しなどの粉本類、収集資料などからなる「守住家資料」数千点が所蔵されている。これらの資料群を整理・分析・展示した成果としての図録・大橋俊雄編『生涯二百年 守住貫魚—御絵師・好古家・帝室技芸員—』（徳島県立博物館 二〇〇九年一〇月）は、守住貫魚の画業を知る上で貴重なものである。

同図録には掲載されていないが、「守住家資料」のなかに阿波国一宮である大麻比古神社（鳴門市大麻町板東）を描いた粉本が含まれている（写

真1）。縦二三・九cm、横四七・五cm。俯瞰的に大鳥居から本殿に至る大麻比古神社の参道が描かれている。大麻比古神社は、主祭神大麻比古大神・猿田彦大神の二神を祀り、阿波・淡路両国の総産土神として徳島藩主蜂須賀家から篤く崇敬され、庶民からは「大麻はん」「大麻さん」と呼ばれ親しまれた。後背の大麻山は御神体山とされ、また航海安全の目印山とされた。大麻比古神社は、度重なる火災により、江戸時代の社殿や宝物などのほとんどは焼失しており、江戸時代の大麻比古神社の様子を知る史料や美術品はほとんど残されていない。その意味で興味深い作品であると注目していた。

落款部分には、次のようにある。

明治七年四月廿日

守住貫魚（花びら印影）

（方印影）

この落款の記載により、本作品の原画は明治七年（一八七四）四月二十日の作品であることがわかる。貫魚署名の下の花びら印は印文「貫魚」、守住貫魚の部分の方印は印文「天成」と推定される。また、右上方には「大麻比古神社」との社印影が見える。

近年、この粉本に関連すると推定される作品を見出すことができたのでここで紹介したい(写真2)。

守住貫魚筆「大麻比古神社遠望図」は、絹本着色で、縦三六・五cm、横四八・七cm。図様は、(写真1)と同じである。右手に朱塗の大鳥居を描き、左手の朱塗の本殿に向けて長い参道の木々が描かれている。手前には川が流れ、左手奥には大麻山が見える。右手上部には旭日が添えられている。貫魚が実際に大麻比古神社を訪れ、写生したスケッチを基に描かれた作品と推定されるが、実景をそのまま反映して作品が完成しているわけではなく、参道の長さや大麻山の位置など多少の省略や変更がなされているようである(写真3・4)。

左下には、

明治七年四月

守住貫魚(朱文方形印・印文「貫魚」)

との落款がある。粉本とは印が異なる。

この作品には、木箱が伴っており、その蓋表には以下のような墨書が記されている(写真5)。

明治七年四月二十七日大御神楽
之時授与

大麻彦神社真圖 一張

宮司兼大講義

畫圖

松野直維

守住貫魚

箱書きには、「大麻彦神社」とあり、徳島市明神町の大麻彦神社(後大
麻比古神社と改称)と考えられないこともないが、描かれた景観や粉本の
「大麻比古神社」印などから、鳴門市の大麻比古神社のことである。

本作品は、粉本とともに、江戸時代後期の大麻比古神社の景観を知る上
で貴重な絵画作品である。

(文学部日本文学科日本文化史研究室)

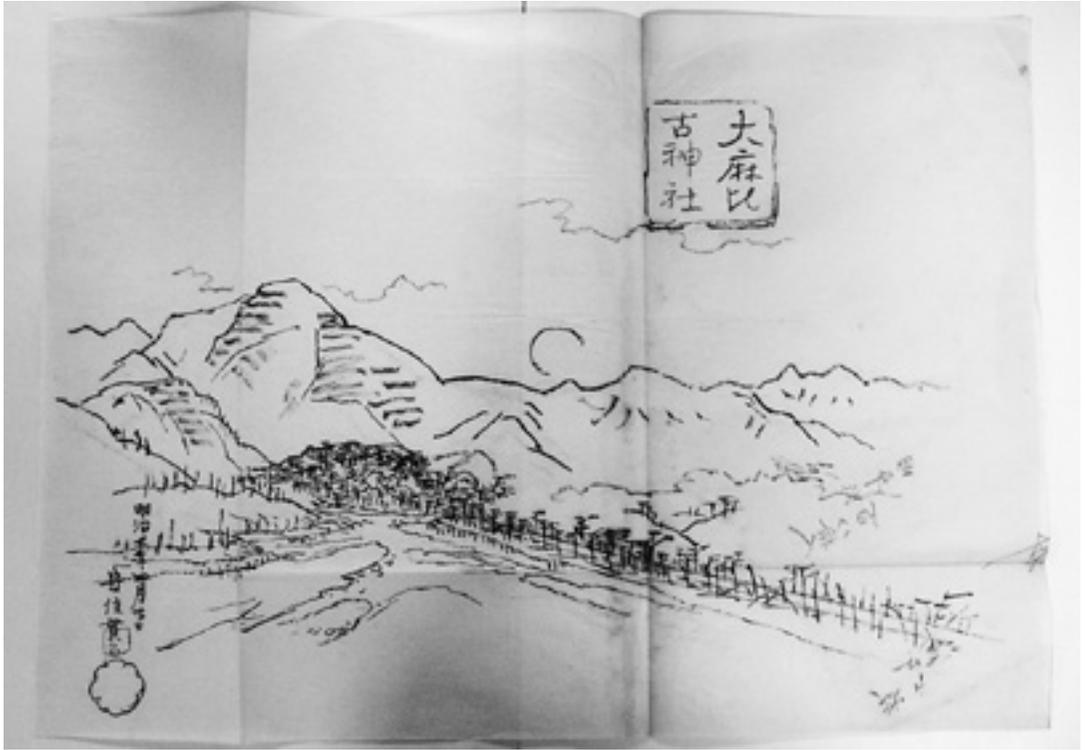


写真1



写真3・4



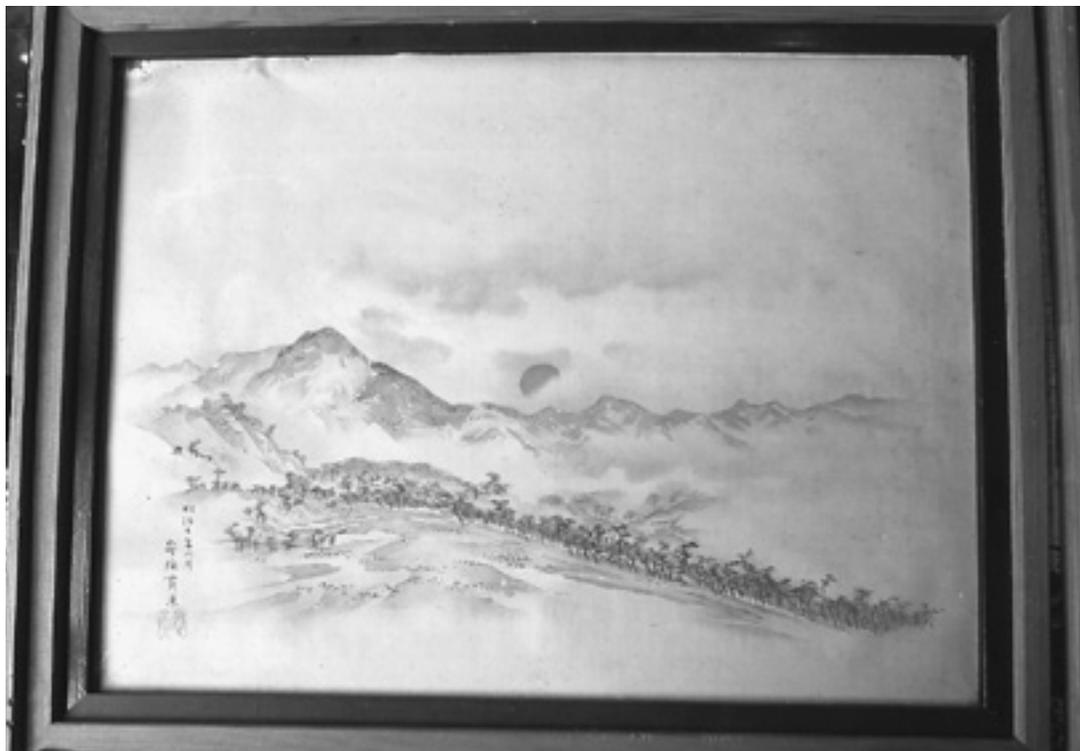
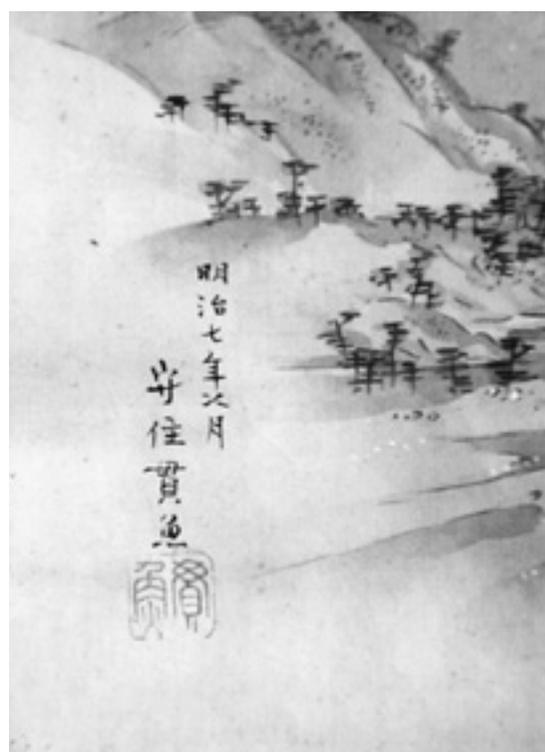


写真2



明治七年四月二十七日大御神来
之時授り

大麻彦神社真苗一張

真苗

宮司

萬權大納言

梶野真雄

守住貫魚

写真 5